

日本のデリバティブ市場を牽引する大阪証券取引所 超高速売買システムの導入など、 国際標準を体現した最先端の取引所を目指す

日本におけるデリバティブ取引で、圧倒的な存在感を見せ付ける大阪証券取引所。2010 年度後期に予定される次世代売買システムの導入を機に、新たな取引所改革に取り組もうとしている。大証は何をめざすのか、その全貌を山澤光太郎取締役に問う。

(株)大阪証券取引所 山澤光太郎取締役



世界的に信頼性の高い「日経 225」のマザー市場であることが最大の強み

—大阪証券取引所はデリバティブ取引で、日本 No.1 の市場です。昨年度の取引高は前年度比 32.2%増と圧倒的な強さを示していますが、その秘訣はどこにあるのでしょうか？

山澤：大阪証券取引所(大証)がデリバティブ取引に強い理由は3つあります。日本を代表するデリバティブ取引である「日経 225 先物取引」および「日経 225 オプション取引」は、大証に上場されています。これらは日経平均株価を原資産としています。海外で日本の株価指数といえば、「日経 225」を指すのが常識です。つまり、商品自体の信頼性が高いこと。それがデリバティブに強い最大の理由です。

第2の強み、それは大証と証券会社との緊密なネットワークにあります。日本では貯蓄から投資への流れが加速しており、世界一といわれる個人金融資産が、デリバティブを含む金融商品に向かおうとしています。大証は証券会社との強力なネットワークを活かし、その受け皿になるべく取引所改革を推し進めています。

第3は、売買システムの強みです。近年、デリバティブ市場で急速に存在感を増しているのが、マーケットメーカーやプロットレーダーといった市場参加者です。彼らは売買システムの高速化を強く求めています。現在、大証での売買 1 件当たりの処理スピードは公称 60ms で、日本ではトップクラスです。来年度に導入予定の次世代売買システムでは、飛躍的なスピードアップを予定しています。

コロケーションサービスなどで利便性を高め、海外投資家の期待に応える

—大証は中期経営計画で「海外投資家の取り込み」を掲げています。そのため、どのような施策を考えているのでしょうか？

山澤：大証の場合、先物取引の 50%強、オプション取引の 60%強が、海外投資家による取引です。大証では海外投資家のさらなる獲得に向け、次の施策を実施しています。

本年度より導入したのが、「リモートメンバーシップ制度」です。この制度は、日本に支店をもたない外国の証券会社に、手軽に市場参加してもらうサービスで、一定基準をクリアした外国の証券会社に、資格を付与する制度です。これには金融庁の許可が必要になりますので、これから環境整備を行い、早期の運用開始を目指しています。

昨年 11 月からは、「コロケーションサービス」を開始しました。これは大証内に用意したブレードサーバーに、顧客専用のブレードを設置することで、タイムラグのない取引をしてもらおうというサービスです。売買注文に 1/1,000 秒～1/10,000 秒を争う、超高速時代のサービスとして、外国の証券会社・投資家からご好評をいただいています。

取引時間に関して、これまで「日本の証券取引所は取引時間が短い」と指摘されてきました。そこで大証では、取引時間の延長に着手しています。ヨーロッパ市場の開所時間に合わせた 16:30～20:00 の「イブニング・セッション」を 9 月より開設するほか、ニューヨーク市場の開所に合わせた、「ナイト・セッション」の開設を検討しています。大証は世界的な動向である 24 時間取引に向け、着実に歩み続けています。

ジャスダックとヘラクレスの市場統合で新興市場の活性化を目指す

—大証は昨年末にジャスダックを子会社化しましたが、ジャスダックとの統合作業をどのように進めていこうとしているのでしょうか？

山澤：現在 3 つの観点から統合に向けた作業を進めています。

1 つ目は、システム統合です。総コストの 6～7 割を占めるシステム費用を、システム統合で大幅削減するのが狙いです。9 月の連

休明けには統合が完了する予定です。

2つ目は、経営統合です。狙いは人事・組織面を含めた業務効率の向上です。ジャスダックを完全子会社化し、来年の3月か4月までに経営統合する予定です。

3つ目は、市場統合です。日本には新興市場が6つあり、過剰な上場企業の誘致競争で上場基準が甘くなると、投資家の信頼を失うことになりかねません。私たちはジャスダックとヘラクレスを統合し、先進的な企業が競って上場する、そんな革新的な市場にしたいと意気込んでいます。市場の名称は、ジャスダックとする予定です。

ナスダックとの提携を生かし、新売買システムに「OMX クリック」を採用

—大証は中期経営計画で、2010 年度に新売買システムを導入すると明記しています。新システムの特徴、内容、期待される導入効果などについてお聞かせください。

山澤： 大証の売買システムは日本ではトップクラスの処理スピードです。しかし、世界的に見ると数段の高速化が必要です。大証は今年2月、米ナスダック市場を運営する、ナスダックOMXグループと戦略的提携を締結しました。新売買システムはナスダックが導入している「OMX クリック」を予定しています。

OMX のシステムは世界約70の取引所で採用されており、比較的大型のクリックは17の取引所に導入されています。処理スピードは平均10ms以下と世界標準をクリアしており、拡張性も容易で、信頼性の高さでも定評があります。

大証では新システムの導入にあわせて、デリバティブの売買制度を改革する方針です。日本の取引所では、手商いのルールをコンピュータに移行してきましたが、大証はそれを廃棄し、グローバルな売買ルールに変更して、海外の投資家にとっても違和感のないものに変えていきます。

透明性・安全性・利便性に優れた「大証 FX」をスタートさせる

—今年7月23日、「大証 FX」がスタートしました。「大証 MX」の市場としての特徴や狙いについてお聞かせください。

山澤： 2007年に施行された金融商品取引法により、日本でも証券取引所が、証券以外の金融商品を取り扱えるようになりました。そこで、投資のフィールドを拡げ、幅広い投資家に外国為替商品の新たな市場を提供しようと創設したのが、「大証 FX」です。昨年の金融危機以降、現物株やデリバティブ取引が苦戦する中で、FX市場は急速に伸びています。私たちは「公正で安全な取引所」をアピールして、市場の健全な育成を行っていきます。

「大証 FX」の特徴は、マーケットメーカー方式とオークション方式を融合した市場を創設し、価格形成の透明性と流動性を確保したことです。融合方式とすることで、マーケットメーカーが提示した価格の間に、一般の投資家がオークション方式で取引に参加することが可能になりました。開設時はマーケットメーカー2社と取扱業者5社の参加でしたが、今年度末までに取扱業者が増え、10数社になると予測しています。

世界初の先物取引所の伝統をいまに生かす、革新的な取引所でありたい

—大証を世界の投資家が注目する取引所にするために、今後どのような改革を行なおうとしているのでしょうか？

山澤： 大証が目指しているのは、海外の投資家にとって、開かれたフレンドリーな取引所にあること。そして、グローバル・スタンダードを体現した取引所にあることです。そのためには、クイック・トゥ・ムーブで、真っ先に新しいシステムやルールを取り入れる、革新的な取引所でありたいと考えています。

先進性という点では、大証は世界で初めて先物取引を行った、大阪・堂島の「帳合米取引」(1730年)の伝統を継承しています。その進取の気性はいまに引き継がれており、日本の取引所で初めて株式を上場したものの大証です。大証はこれからも、世界最先端を目指す取引所として、取引所改革に力を入れていく所存です。